

平成 30 年度 豊中市総合計画審議会

第 2 回会議 議事要旨

日時 平成 30 年(2018 年)9 月 27 日(木)18 時 30 分～20 時 30 分

場所 第二庁舎 3 階大会議室

出席者 加藤会長、大野委員、宗前委員、久委員、水上委員、壬生委員、宮前委員、中塚委員、
山田委員、吉原委員

計 10 名

欠席者 濱元委員

計 1 名

事務局 長内市長

政策企画部企画調整課：榎本、佐野、東良、上野、上田

- 案件
1. 豊中市行政評価指針(素案)の諮問について
 2. 前回の振り返り
 3. 豊中市行政評価指針(素案)について
 4. その他

資料 資料 1 第 1 回豊中市総合計画審議会の議事要旨

資料 2 豊中市行政評価指針(素案)について

資料 3 政策評価シート(案)について

資料 3(参考) 政策評価シート(案)について

参考 1 第 4 次豊中市総合計画(本編)

参考 2 第 4 次豊中市総合計画(概要版)

参考 3 平成 29 年度(2017 年度)政策評価結果

会議録 下記のとおり

1. 開 会

(開会)

(市長挨拶)

事務局：

(成立要件の確認)

事務局：

(配布資料確認)

2. 案件 1 「豊中市行政評価指針(素案)の諮問について」

(長内市長から会長に諮問書の手渡し)

3. 案件2「前回の振り返り」

会長：

- ・ 前回の会議では、様々な意見をいただきました。前回の振り返りの説明を事務局からお願いします。

事務局：

(資料1に基づき説明)

会長：

- ・ 委員の皆様から、今の振り返りについて趣旨が違う等の意見はありますか。

(意見なし)

4. 案件3「豊中市行政評価指針(素案)について」

会長：

- ・ 「豊中市行政評価指針(素案)」について事務局から説明をお願いします。

事務局：

(事務局による資料2、資料3、資料3(参考)、資料4を説明)

- ・ 最後に本日欠席している委員より指摘事項をいただいているので紹介します。
「障害者雇用について、近年、国の官公庁や都道府県の水増しが明るみとなり、適正な雇用がなされてなかったという実態が浮かびあがってきました。そういったことも踏まえて障害者雇用の促進に関する実績も、今後評価していく上で、改めて適正かどうか点検していただきたいです。」

会長：

- ・ 資料の説明をしていただきました。
- ・ 質問ですが、資料3と資料3(参考)について、表裏の両面印刷ですが、別資料ですか。
- ・ 資料4のスケジュールが年度の記載がないため分かりづらいです。
- ・ 年度の標記が必要です。

事務局：

- ・ 資料3については、そのとおりです。

会長：

- ・ 表裏セットで使用していくものではないのですか。
- ・ 表面は(2)を方向性として取り上げていますが、(1)(2)(3)もあるのですか。

事務局：

- ・ そのとおりです。

会長：

- ・ 施策の方向性ごとのシートがあるのですか。そうであれば裏面の「施策の方向性」のところに表面のようなシートがそれぞれ3枚並ぶということですか。

事務局：

- ・ 1-1の施策で申し上げると、裏面の施策を評価するシートが1枚と、表面の施策の方向性ごとのシートが(1)(2)(3)と3枚あります。17施策のシートと施策の方向性ごとの51シートがあるというイメージです。

会長：

- ・ 裏面は施策名を2段にわけて記入していますが、2段目の文章は総合計画の各施策の下にあるリード文章をそのまま記入しているのですか。

事務局：

- ・ そのとおりです。

会長：

- ・ 施策の評価シートは、施策の方向性のシートが3枚並んだ後に4枚目として出てくるのですか。

事務局：

- ・ 施策の評価シートと施策の方向性の評価シートの見せ方については、まだ固まっていません。

会長：

- ・ 施策の評価シートと施策の方向性のシートはセットではなく別資料ということですか。

事務局：

- ・ そのとおりです。

会長：

- ・ 他に質問はございませんか。

委員：

- ・ 今どき「成果重視の行政運営」という項目に驚きました。民間では、数十年前に欧米から成果が上がるものを評価するのが当然と言われ、日本のほとんどの企業が成果重視になりました。そのため、やらなければならないことがあっても、成果が出ないものは評価されないし、評価されないと予算が回ってきませんでした。最近になり、上場企業も舵を切り、成果とチャレンジの両方が大切となってきました。

会長：

- ・ 今のご指摘は「成果重視の行政運営」をしていると、方向性を見失ってしまう、ということです。
- ・ この評価制度では、やらなければならないことは挙げておいて、PDCA の中で見ていきます。成果が上がるものと上がらないものがありますが、上がらないものについては、成果を上げられるように、チェックをしてアクションをどうするか、次の段階に入っていくための評価をします。成果が評価されないものがおざりにされるということではありません。評価されない可能性はありますが、議論の趣旨は決してそうではありません。

委員：

- ・ 成果重視の行政運営というのは文脈があります。今から 20 年くらい前までは、行政は売り上げがなかなか出ないため、事前予測に基づく予算査定や定員の配置といったことが、重視されていました。しかし、その予算や人員を投入した結果がどうなったかについて、十分に検証されていませんでした。その反省から「成果重視」という言葉が使われるようになりました。「選択と集中」といったニュアンスでの成果重視というよりは、インプットだけをみるのではなく、結果をみましようという趣旨で使われている表現です。

会長：

- ・ 51 の施策の方向性について、このような表を作っていくという認識でいいですか。

事務局：

- ・ そのとおりです。

会長：

- ・ 資料 2 の P4 (2) 政策評価の【対象】で、「施策の方向性」に下線が引いてあり、【結果の活用】の「次年度以降の展開へつなげる」という言葉がありますが、「次年度以降～」の主語が何の展開かわかりません。おそらく「施策」の展開だと思いますが、総合計画では「施策の展開」という言葉は使っておらず、「施策の方向性」しか使っていません。「方向性」に関してチェックをしていくのに、言葉が「施策の展開」というのは、総合計画の中では全体的にはありえません。「方向性」という言葉との整合性を取っていただきたいです。「施策の展開」を「施策の方向性」に直してはどうですか。

委員：

- ・ 「めざすべきすがた」が「施策の方向性」に変わったのですか。

事務局：

- ・ 前回の後期基本計画では計画期間が 10 年で、それぞれの施策ごとに 10 年後の「めざすべきすがた」を設定していました。今回の基本計画は計画期間が 5 年であり、5 年後の「めざすべきすがた」を設定するのがいいのかという議論がありました。そのため、今回の基本計画では「めざすべきすがた」は設定せず、「施策の方向性」ごとにそれぞれ評価をしていこうと

考えています。

委員：

- ・ 前回、会長から全体最適と部分最適の話がありました。部分最適にあたるのは、部門からの評価であり、全体最適というのが総合計画審議会ということでした。資料2のP4の政策評価の内容が全体最適にあたります。
- ・ さきほど市長のマニフェストがあり、それに基づいて評価するというようなことをおっしゃっていましたか。

事務局：

- ・ 市長のマニフェストについては、また別で評価しています。政策評価については、基本的に行政がどのようなことをしてきたか、という形で評価します。事業を行うにあたっては、総合計画と併せて、市長のマニフェストにもとづいて行うものもありますので、どのような事業をするかについては、政策評価にも活かしていくが、評価は別物です。

委員：

- ・ 全体最適は今回の総合計画の何に該当しますか。

事務局：

- ・ 分野別計画での評価との違いについては、施策の方向性ごとでも部局がまたがっているところが多く、施策の方向性自体でも全体最適になりますが、さらに施策という観点で見たときに全体最適という視点で評価できればと考えています。

委員：

- ・ 評価するときにそもそも誰の観点で施策を作るのでしょうか。市民か事業者、または職員か市長、どのような観点でしょうか。

事務局：

- ・ 評価者は、部局長です。行政としてこのような事業を行ってきた結果、どうだったかを評価します。

委員：

- ・ 部局長が中心となって、施策を作るイメージですか。

会長：

- ・ 評価については部局長です。施策はすでに総合計画に記載されています。
- ・ それをどのように展開したか、について部局長が自己評価します。その評価が本当に相応しいかどうかを、メタ評価するという流れです。

委員：

- ・ 総合計画本編 P37 の内容が一番わかりやすいです。さきほどの委員が発言したメタ評価するためには、もうひとつ上の「みらい創造都市とよなか」を評価しないとイケません。このような抽象的な書き方だと、一体何をどう評価したら評価できるのか見えません。次回、総合計画を作成するときは抽象的な書き方ではなく、どういう創造都市をめざすのかを明確にする必要があります。それによって、本来のメタ評価ができます。
- ・ 右の列のリーディングプロジェクトもメタ評価の事例だが、南部という地域に関わった全体最適になります。全体最適が左と右の列に書かれています。右の列はなんとかできるが、左の列は難しいです。

委員：

- ・ 豊中市は待機児童が 0 人になったのですか。現在国が待機児童 0 人を掲げているが全く進んでいません。新聞、マスコミにもあまり取り上げられていない。すごいことだから豊中市はもっとアピールするべきです。

会長：

- ・ その件については、自己評価が出たときにこの委員会で指摘します。

委員：

- ・ 行政評価制度の目的として 3 つほど挙げられています。全体像としてみたときに、評価をして、最終的に予算配分まで行くと思います。行政の場合、業績で評価ができません。市の収益の中で、17 施策へ落とし込むときの大まかな予算の割り振りは誰がどのように決定しますか。
- ・ 豊中市の歳入と歳出がありますが、まずは歳出をどのように割り振ったか。我々は割り振られた財政の中でしか評価できません。例えば、「今期の業績はこれだから 2 割減しよう、その場合、同じ財源ならどこかを減らさないといけない」、ということまでできるのでしょうか。評価は、予算もしくは人事評価に連動していくのでしょうか。結果ではなく、豊中市は「みらい創造都市」を掲げているのだから、将来、何にお金を投資していくのかを考えることが重要です。新しい時代に対する全体の投資を振り分けていくのか。単なる評価は今の固定のものを引いたり足したりするだけであって、これだけのエネルギーをかけて意味があるのでしょうか。本来、豊中市をもっと素晴らしい都市にしようとしたら、その財源を何に振り分けていくのかということも、非常に大切なことです。それが総合計画の根幹になっていくのではないのでしょうか。

会長：

- ・ ご指摘の予算の配分は、市長の特権です。市長が作成し、議会で議決します。そのために、市長がどう考えたらいいかを政策といった観点から助言をするのが本委員会の役割です。助言も何でも言えるものではないですが、総合計画という枠の中で事務事業をもう少しこうしたらどうか、という程度はこの委員会で指摘できます。市長の市政方針にまで助言する権限はありません。

事務局：

- ・ 基本的には会長がおっしゃったとおり、計画的に行政として進めないといけない事業があります。経常経費として支出をしなければいけない部分です。それ以外に使える予算枠の中で市長が予算編成します。その際にこの評価を使って、評価が上がっていないところに予算を使っていくのもひとつであるし、評価が上がっているところを豊中の魅力的なところとして、さらに投資すれば豊中全体の魅力がアップするのではと、市長が予算編成の判断材料として活用できるものとなります。

委員：

- ・ 先ほどの委員が言ったように、「みらい創造都市とよなか」を評価しないといけません。我々は一般的な部分の評価は置いておいて、将来性のある部分の評価を行えばよいのではないのでしょうか。

会長：

- ・ 先ほどの意見にあった、左の「みらい創造都市とよなか」を全部評価するというのは大変です。ブレークダウンした17もしくは51の細目について行政で評価し、その結果を、我々が総合的に評価すればいいのではないのでしょうか。
- ・ 本日は評価シートの中身について議論しますか。

事務局：

- ・ させていただきます。

会長：

- ・ 一番気になるのは、リーディングプロジェクトの評価シートはどのような感じになり、誰がするのでしょうか。

事務局：

- ・ 基本的には「施策の方向性」と同様のシートになります。評価につきましては、企画調整課で評価したものを提示する予定ですが、まだ固まっていません。

会長：

- ・ リーディングプロジェクトについては、評価対象になりますか。その場合、評価シートは次回提示されますか。

事務局：

- ・ 評価対象になりますので、次回提示します。

会長：

- ・ 他に質問やご指摘はありますか。

委員：

- ・ 昨年、豊中市へ市民参画の政策策定の手段について政策提言をしました。行政評価制度検討委員会報告書だと第三者の視点による評価において、「市民参加による評価の導入」という記載がありますが、指針には第三者の視点がないように思います。報告書と違い市民参画はしないのでしょうか。

会長：

- ・ 政策評価審議会の中に市民委員はいますが、その委員の参加よりさらに広く市民参加の評価はないのか、という指摘です。

事務局：

- ・ 今のところは考えていません。審議会の中でそれぞれの学識経験者の専門的な視点と市民 3 名に入っていていただいて議論してもらっています。

委員：

- ・ 評価制度とは違うが、京都では施策策定の段階で公募市民が 100 人規模で関わっています。豊中でもうまくできないのでしょうか。

会長：

- ・ 総合政策の策定過程では、多くの市民が参加というのは一般的にはなっています。評価の段階ではどうでしょうか。

委員：

- ・ 現在の行政評価は、自己評価です。つまり行政が総合計画という市民に対する約束事に対して、具体的に実施してきたことや予算、人員配置に対しての評価なので、行政に対する土地勘が全くない人が外部評価するのはとても難しいです。私は地方自治を専門にしていますが、個別の事業に対して詳しい知識を持っているわけではありませんので、「1-1 子育て支援の充実」を見てもなるほどという感覚はありません。しかし、仮に子育て支援をしっかりとやると言いながら、全く保育所の建設に予算を使っていないとか、平成 27～29 年の結果、全く待機児童が減っていないということになると、最初に出した基本計画や総合計画で言っていることに齟齬があるという指摘はできます。
- ・ 行政の評価に対して指摘をするのが、評価委員会の役割です。行政は複雑なので、ある程度のイメージを持った上で、基本的にはお手盛りになっていないかどうか確認します。
- ・ 市民からみてうまくいっていないのではないかとということに対して C 評価や、うまくできているとことに対して B 評価がついていけば率直な評価です。B を B プラス、A 評価に上げていく手段は何かと尋ねていく場として評価を機能させると、行政内部としても外部からいろいろ言われたという意識は持たないのではないのでしょうか。市民がいきなり評価を言うのは難しいため、この委員会が代理人の役割を果たしています。

会長：

- ・ 採点者としてある程度の価値観の共有ができていないと、全く違う採点基準を持っている人が参加したら評価できません。

委員：

- ・ 2点質問があります。
- ・ 前回の振り返りでも出ていた評価疲れの話と関わるが、資料2のP7、事務事業評価を受けて政策評価をすとなつていますが、事務事業評価の労力がかかなり大変なものです。それがうまく政策評価につながっていけば、労力を軽減できます。例えば政策評価をしている根拠資料として、事務事業評価シートが使えるとかであれば労力軽減を図れます。そのあたりの設計はできていますか。できていなければもう少し取り組んでいただきたいです。
- ・ メリハリがある評価をしていただきたいです。そうすれば、評価する方も見る方も楽です。たくさん記入されるとポイントがぼやけてしまいます。大学評価も自己点検をしています、大学基準協会のフォーマットの中で良いのは、効果が上がった点と残っている課題を個別に記入させて、メリハリがあります。残った課題に対してアクションを起こすことでPDCAがわかりやすくなります。その観点で現在の評価シートを見ると、効果があつた取組みは何か、残った課題は何かという2段構えにした方が、記入する方も書きやすいし、見る方もわかりやすいのではないのでしょうか。

事務局：

- ・ まず後者の点については、指摘のとおり、「これまでの取組み」という見出しだと、こちらが意図したことが記入されないことがありました。そのあたりの表現を「効果」「成果」など検討します。
- ・ 事務事業と政策評価の連携についても、現在庁内で検討しています。よりよい形で事務事業と政策評価がスムーズに連携できるように考えています。

委員：

- ・ もっと直接的に言うと、事務事業評価レベルは係長クラスがし、政策評価は部長クラスがします。係長クラスが作ったデータをうまく吸い上げ、部長クラスが政策評価シートを記入できるような連携が図れれば人的連携も図れるので、設計をうまくやっていただきたいです。

事務局：

- ・ 実施計画の中で施策の方向性ごとに事業を分けています。施策を推進するために事業をしていると理解してもらうために、実際に事業をしてみた中で施策に対してどのような役割を果たしたかを、事務事業評価の中で評価できるようにしたいと検討しています。

会長：

- ・ 今の話を整理すると、資料3の表面①これまでの取組みを「これまでの成果」としたらどうでしょうか。また、②問題点・今後想定される事項を、あいまいな表現ではなく積極的に反省、できなかった問題点というように記入しやすくしていただきたいということでした。

- ・（資料3（参考）の）右欄に記入されている文章はどうか。

委員：

- ・ これでいいと思います。うまくいっているところを出すよりも、うまくいっている部分とうまくいっていない部分がちょうど半々くらいになるような、モデル部分のシートを作ってもらった方がわかりやすいです。

委員：

- ・ 民間からすると、こういうシートはありません。最後に備考欄とか自由意見欄があります。そこで、シートの考え方にあてはまりにくい仕事のズレを最後に出します。このシートだと、すべての仕事をこれに当てはめるように書かなければなりません。それが当てはまっていれば問題ありませんが、考え方が違うとそうでないケースも多いのではないのでしょうか。そのあたりを検討していただきたいです。

会長：

- ・ 部局長は大変な労力を要求されます。それをまた評価したらどうでしょうか。基準協会が行っている大学の自己評価では、文科省はそれをもって予算配分を変えてきます。

委員：

- ・ そこまではやっていません。

会長：

- ・ やってないのですか。

委員：

- ・ いろいろ改善勧告は入ってきます。それで改善できなければ、補助金カット、みたいな話もあります。

会長：

- ・ やはり都合のいいことしか書きません。そういうことがないように、いかに公正・公平に記述されているかということをこの委員会で見ていきます。

委員：

- ・ 評価委員は、できていないことを評価してはいけません。PDCAが回っているかどうかを評価しないとはいけません。だから、「正直にできないことはできない、と書いてください」と伝えなければなりません。できていないことに対して、ちゃんとアクションが書けているかどうかということを、評価委員はチェックしないとはいけません。できないことを責めると、嘘を書いてしまいます。これは今回の評価ではしてはいけません。正直に本当にできない、ということが表に出てこないでPDCAは回っていきません。

会長：

- ・ 貴重な意見です。

委員：

- ・ 政策評価結果を見たら A と B しかありません。評価のランクはどのようになっていますか。

事務局：

- ・ ABCD で評価しています。配布している政策評価結果は、計画期間の最後の方であるため、評価が上がり、A と B だけになっています。

委員：

- ・ 初めて見たときに A と B しかないのだったら、A がよくて B が悪いのかなと感じてしまいました。A と B の差、どれぐらいなのかわかりませんでした。

会長：

- ・ 評価をする目標は、成果重視の行政運営、職員間の目的・課題の共有、説明責任の確保と 3 つです。もう少し具体的に言うと、このような自己評価制度を通じて、結局お金のやりとりになっていきます。評価は、その客観的な配分の理屈を、透明性を持って示すための道具となります。
- ・ 配分は行政内部、市長にやっていただくが、そのために我々は援助するという役割です。
- ・ 次回までにもう少しこの評価シートの内容を精査していただきたい。評価シートに対してご意見があればお願いします。

委員：

- ・ 先ほどの委員が言われたとおり、A と B で C がありません。何が A で、何が B かははっきりしていません。

事務局：

- ・ 評価結果の冊子の P4 評価結果総括で 24 年度からの評価の中で、ABCD の推移があります。24 年度でいうと、C は 5 つ、B が 52、A が 9 であり、それぞれ事業を行い、指標が上がったため、A と B が増えています。

会長：

- ・ C があるというが、これは 66 施策だから C がありえた。17 になったらおそらく C は出てきません。
- ・ 51 の施策の方向性一つひとつに関しては ABCD がつきます。それを全体的にどう見るかというはあるのでしょうか。17 施策に対しては、17 単位で ABCD がつくのでしょうか。

事務局：

- ・ 資料 3 の裏面のように評価します。

委員：

- ・ そのあたりを我々も共有しておかないといけない点です。ABCDでCやDってよくないからダメなのか、という話になります。そうではなくて、これはいつも行政の方には申し上げているが、課題があってそれが解決できるともうその事業は必要ないです。だから、やめてしまってもいい、ということになります、やめません。課題が解決したらその事業は打ち切りでいいです。だから、Aがついたらそれはもう行政が手を出さなくてもいいです。逆に、がんばっていてもCになっているのは何かてこ入れをしないとイケないということです。そこに集中的に財源を配分したり、あるいはその施策の展開の構造を考えていくなど、てこ入れする部分と判断できます。そのように見て、Cは悪いのではなく、それこそ我々も知恵を働かせて一緒に考えていかなければならない、という評価になれば、Cはもっとつけやすくなります。

会長：

- ・ 非常に良い意見です。そういう趣旨を部局長、原課に伝えることが大切です。Cが増えたら、行政課題が明確になっているということです。非常に重要な視点です。

委員：

- ・ まったく同意見です。特にタイミングがいいです。今回はリーディングプロジェクトとして、南部を目玉にしています。南部に対する取組みは本来難しいから、何をどうしてもCからなかなか逃れられません。それを「真正面からやりましょう」と言えるタイミングです。委員がおっしゃったように、本来Aというのは卒業が近い事業です。実際には行政がやる仕事で卒業はなかなかありません。でも、理念的に言えばAがずっと続いているなら、そろそろそれは非行政的な分野でやって、CとかDのついた事業に注力しましょう、というのが本来の筋です。そういう意味では、「C、Dをつけることを恐れなくてください」、と伝える必要があります。あるいは、評価する側もそのようには見てない、ということをご伝えたいただきたいです。

会長：

- ・ その趣旨を踏まえて、このシートを設計していただきたいです。

委員：

- ・ 政策評価シートのこれまでの取組みや今後の施策展開は、何を書けばよいのかを端的にわかるような表題にすることが大事です。それに加え、いつのことを書くのかが、しっかりとわかるようにしていただきたいです。施策の進捗状況において5年間でA～Dをつけていくことになるので、2年目、3年目となった場合に、単年度の成果を書くのか、それとも通した成果で見るのかわかりづらいです。どの期間で評価自体をするのかしっかりと徹底しておかないと、評価シートによって評価内容が違ってくるということになります。また、他の団体の評価シートを見ていて、効果や課題について毎年同じことを書いているということがよくあります。それをチェックするのが私たちの仕事でもあります、あくまで30年度の評価は30年度のみのことを書くということが、しっかりと伝わるようにしていただきたいです。

- ・ 政策評価シートの指標名が8つ入るようになっていますが、この指標は何を見て、どういう基準で選ばれ、挙げられているのですか。今までやっていた、29年度の冊子のものと「めざすべきすがた」があり、これだけでも漠然としていて選びにくいという話になりましたが、そこから指標名を挙げて、その指標がこの施策を評価するのに適切かどうかを委員会で検討してきました。これだけを見ると一体何をもとに、どういった考えでこの指標を挙げたのかということが、私たちにとって、とてもわかりにくいです。これから検討される部分であるとは思いますが、大体の考えがあれば教えていただきたいです。

事務局：

- ・ 前回の政策評価の際も、指標の設定については「めざすべきすがた」に対して、それが進んだかどうかを見るための指標を設定するようにしていたが、現状は難しい部分もありました。今回についても、施策の方向性、例えば1-1- (2)「安心して子育てが出来るように支援します。」という施策の方向性を説明できるような指標を設定したいと考えています。これでいうと待機児童数ということで、待機児童がゼロになれば、安心して子育てが出来る環境の要因という指標になります。基本的にはそういった観点で各部局に指標を検討いただいています。

会長：

- ・ そのとおりではありますが、もっと明確にいうと、下の3つの文章の説明根拠としての指標があるべきです。指標として「めざすべきすがた」の将来像であっていいですが、むしろ下で述べていることが先で、その根拠データとして挙げていただきたいです。

委員：

- ・ 指標はあくまで参考データとして、年度ごとに引用したいものが変わってくる可能性があるのなら、指標の位置はここではないのではないのでしょうか。上と下のどちらでもあり得るが、どのように指標を用いるのか、どういう目的で指標を使うのかによって、評価シートのどこに置くのがいいのかについても考えなければなりません。

事務局：

- ・ 前回の政策評価では、指標がこの位置にありました。この位置に指標があると、評価する際、指標の上がり下がりが議論の中心になってしまっていました。今回は指標の上がり下がりよりも、PDCAをまわしたいと考えています。そのため、今後どういう展開をしていくのかに力点を置きたいと考えています。指標の位置やシートの見せ方についても検討します。

委員：

- ・ 施策の方向性の進捗状況の位置も、どこに置くかで実際に評価シートを書く方が何を根拠として判断するのかが変わってくる可能性があるため、併せて項目の順番を検討する必要があります。

事務局：

- ・ 第3次の時は「めざすべきすがた」に合わせる指標でした。今回は施策の方向性、たとえば

安心して子育てが出来るように支援をし、その支援をした先にどういったことがあるのかということ、支援した先に待機児童がゼロになるなどといったことを、部局のなかで作っている過程です。その指標の動きに沿って下の部分を作成していきたいということで、指標を上の部分にもってきています。

会長：

- ・ ゴールを示す指標と、過渡期の成果を示す指標で、性格の違う指標が混在することになるでしょう。それを文章できっちりと書いていくことです。上下はお任せします。

委員：

- ・ 先ほどの委員のご指摘のとおりです。私は、データがあり、方向性の評価、それに対して文章でエビデンスを書くということに慣れすぎていました。一方で、そうした様式では、職員に対して成績表をつけられているような感覚を迫っていたのかもしれない。先に①②③の標記があり、データとABC評価を後につけるとするのは一案です。職員を委縮させるための評価であってはならず、仕事をまわすということを意識させることに力点が置かれるべきであれば、数値を先に出すと、どうしてもそれに縛られてしまいます。①②③の定性的な表現を優先させるのは良いです。

会長：

- ・ 次回まで1か月あるので十分に検討していただきたいです。その時に指標はできますか。

事務局：

- ・ 施策の方向性ごとに設定している指標の一覧表をお示しします。

委員：

- ・ これを記入する方々にとって、自分たちのどこを測られているのかという感覚に陥りやすいです。何をもちて評価をするのが重要です。自己評価ではありますが、感覚的につけているのかどうか。出来なかったところを見るのか、PDCAがまわっているところを見るのかを、最初に明確にしておくことが大事です。努力をしているということでもよいのか。大学などでは、ルーブリックといわれる自己評価の表があります。授業のいくつかの目標となる指標があり、それぞれの指標で最もよく学べた場合とそうでない場合とで4段階ほどにした表であり、それを用いて学生がどこに位置するのかを自己評価させるものです。そこまできっちりと項目をつくるのは大変ですが、自分たちが何をどれくらい取り組めていればBなのか、結果につながればBなのかということ、事前にイメージを持っておかないと、やっているうちに徐々に、前回の評価であった矢印で上や下と評価する部分にいく可能性があります。

委員：

- ・ 評価シートは、字が小さく、この状態で冊子として配布すると、高齢者には見づらいです。

委員：

- ・ 政策評価結果が文章ばかりで図がなく、わかりにくいです。国の各省庁の政策評価シートを見たことがありますか。

会長：

- ・ 行政は、法律の書き方と同じだから文章ばかりです。

委員：

- ・ ポンチ絵はイメージ的でわかりやすいですが、実は何も書いていないものが多いので良くありません。図示化するのが、直感的にわかるとは必ずしも言えません。

委員：

- ・ 人権についてどのように評価しますか。人権の状況は厳しく、講演会を開いても人が集まらず、そういったなかで施策としてやっているところを、どのように目に見えるかたちで評価するのか、イメージがつきません。次回で示される指標を拝見して検討したいです。

会長：

- ・ 本日ご欠席の委員の意見とも関連するご指摘です。第4章「共に生きる平和なまちづくり」に人権の方向性があるが、これについてどのように具体的な表となって出てくるのか見ていただき、ご指南いただきたいです。

事務局：

- ・ 次回、指標の一覧をお示しするので見ていただく。基本的に庁内会議のなかで政策評価シートについては合意しているので、ご意見をいただきながら答申の中に入れていければと考えています。答申案は4回目で、これまでの意見をまとめます。

会長：

- ・ 自己評価するのは行政側なので、そちら側でよく調整をしていただきたいです。

5. 案件4「その他」

事務局：

(事務局から連絡)

会長：

- ・ これにて終了します。ありがとうございました。

以上